
WinterBells

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WinterBells

【Nコード】

N5721D

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

哀は歩美に誘われてコンビニにやって来る。そこで偶然であった人達と出会う事件は。

冬の日には既に落ち、暗い。

雪もちらつてきた。

歩美は頬を上気させている。

寒さを感じていないのだろうか一応声をかける。

「ね、吉田さん。

風邪ひいちゃいけないから、お店の中に入らない？

江戸川君、来るまで少し時間がかかるって言っていたし」

「そうね、哀ちゃん、寒いよね」

「私は別に」

そう話しつつ二人はコンビニの店内に入った。

数日前、何日か、続けて目を赤くして登校して来た歩美。

探偵団の面々は心配して理由を聞いたが、歩美は答えなかった。

哀は、二人だけになったとき、理由を聞いてみた。

すると恥ずかしそうに、コナンのクリスマスプレゼント用に、ペアのビーズの指輪を作っているのだと、恥ずかしそうに答えた。

その時は

“ 幸せでいいわね ”

と思っただけだった。

しかし、その翌日、歩美は哀に、小さなプレゼントを手渡した。

「少し早いけど、完成したから、早く渡したくって」

少しばかりゆがんだ形のビーズの十字架のペンダントだった。

「メリークリスマス」

それから、歩美の目が寝不足で赤くなる事は無かった。

そして、クリスマスイブ。

わざわざコナンを事務所近くのコンビニに呼び出しながら、

“コナン君にプレゼント渡したいけど、勇気が出ないからついてきて”

そう頼まれた時、私はなぜ断らなかったんだろう。

哀は胸に触れるペンダントを意識する。

断りきれなかったのは、プレゼントをもらったからだ。

それに、暗い中、子供を外に、一人にしておくわけには行かない。そう、それだけの理由。

「えっと、サンデーマートでは、アイスクリームとチキンね」

千葉からのメモを確認しながら、佐藤は言った。

「ホワイトダックで全部買えば手間要らずなのに。」

千葉の奴。細かいんだから

食べ比べなら、千葉の舌は確かに、信頼できるけど、

コンビニに、ここまで銘柄指定しなくてもなあ。

サンデーマートは、駐車場そばに無いのに」

高木はぼやいた。

「ま、よいじゃない。同じ買うなら、美味しいものの方がいいし」

「そうですね」

二人は顔を見合わせて笑った。

今年の仕事は、本当に忙しく、クリスマスのデートの計画どころではなかった。

それでも、イヴには何とか仕事の帰りにでも二人の時間を作って、と考えていた高木だが、目暮警部の『部下思い』のせいでその時間も無くなった。

「今日は、クリスマスイブ。」

だから、今日だけは、小学生以下の子供がいるやつは、定時で帰れ。その分、他の皆は働いてくれ、な。

その代わり、晩飯をおごってやりたい所だが、外に出る時間は無し。

だから、仕事で外に出る者に、ケーキやクリスマスらしい食べ物を
買ってきてもらって、短い時間だが、ここでクリスマス会でも、し
よう」

“クリスマス会って、小学生じゃないんですが”
高木は思った。

警部の気持ちはありがたかったが、そんなことをするより、少しで
も早く仕事を終わらせたい、高木であった。

意外にも反対するかと思っていた、白鳥や、高野が率先して賛成に
回り、役割を割り振った。

そして、聞き込みにでる佐藤、高木が、食料調達係。

しかし、聞き込みも買出しの場所も別方向。となると

“このクリスマス会、誰かが裏で目暮警部を操っている”
と思わざるをえない高木であった。

しかし、聞き込みの途中での佐藤の電話に、自分はまだ神に見捨て
られてはいないことを、高木は知った。

「ごめん、高木君。

こっちのサンデーマート移転していたの。

私、今日は車じゃないから、別のサンデーマートまでいけないし、
そっちの用事が済んだら、私を拾ってくれる？」

ほんのひと時、二人でデートの気分の高木であった。

コンビニに入ってきた二人に、哀と歩美は同時に気づいた。

二人に声をかけようとする歩美を、哀は止めた。

「二人で、デートみたいじゃない。

邪魔しちゃあ、悪いわ」

コンビニの店内は、学生や仕事帰りのサラリーマンで、込み合っていた。

と、その中で不審な動きをする男に高木は目を止めた。

店員は、客に話し掛けられ、男の動きには気づいていない。

思わず高木は佐藤の方を向く。

佐藤は頷く。

高木から離れて佐藤は入り口の方へ行く。

高木は男のあとをさりげなくつける。

そして、男は店内を何気ないふりをして歩き、

先ほど、店員に話し掛けていた女といっしょに店から出ようとした。

「レジを通ってから、出なくちゃあいけないわね」

男の手を佐藤が抑えた。

「なにすんの！このブス！」

女がわめいた。

佐藤が静かに言った。

「鞆の中に、DVDがあるでしょう？」

男はいきなり鞆を振り上げ、佐藤に襲い掛かった。

女は、男が一瞬のうちに佐藤に押さえ込まれたのを見て、

慌てて逃げようとした。

しかし、高木に阻まれた。

「離せ！私何もしないよ！」

セクハラ男！ケーサツ呼んでやるんだから！」

高木はため息をついて手帳を女に見せた。

男がはき捨てるように言った。

「なんだ、オマワリか。」

俺らが、盗るのを見張ってたんか。

ヒマだな。年末の点数稼ぎかな。」

ま、こんなチンケな事してりゃ、一家皆殺しにするような奴をいつまでも、捕まえられないはずだよな。」

コンビニの店長がやってきた。

「やっと、捕まえてくれたか。」

万引きくらい、警察はたいしたことじゃないんでしょが、こっちにとってはね。

特に、さんざん、相談しても動いてくれず、しこたま盗まれた後じやあ。

まあ、一応、礼は言っときますよ」

周りがごった返しているので、哀と歩美は、二人の刑事に近づけなかった。

しかし犯人の罵詈雑言は店中に響き渡った。

「ねえ、どうして、高木刑事も佐藤刑事も、あの人たちに何か言い返さないの？」

それに、店長さんだって、あんまりよ」

「二人とも大人だもの。」

ああいう連中に、何を言っても無駄だと知ってるのよ」

「でも、佐藤刑事なんだか悲しそう」

人ごみの隙間から見える佐藤の顔は、確かに、周りの雑音を傲然と無視しているようには見えなかった。

“父親も刑事、正義のサラブレットの彼女には、あんな言葉はかなり痛いよね。”

それに、高木刑事だって、割り切り型じゃなさそうだし、これは、二人そろって、ドロ沼状態になりそう“

男と女が、連行された後、二人は無言で買い物を済ました。

店の外に出て、佐藤がため息をつく。

「佐藤さん、御疲れ様です」

もっと、佐藤を元氣付ける言葉が欲しかった。

しかし、同じ立場、そして、気持ちがわかる、その事は時として、同情以外の何物もできない事を意味する。

「あの子達、またやるわね」

高木は、否定できなかった。

「店長さんが、怒るのも無理ないわ。」

私たちがすべての、悪事を取り締まれるわけじゃないし、

犯人を捕まえても、反省させることなんてできないものね」

「そうじゃないですよ」

現実を知りすぎている高木には、自分の言葉が、空しく響いた。

二人は、いつの間にか、寄り添って歩いていた。

しかし、求めるぬくもりは互いに与える事ができなかったのである。

犯人は、連行され、そして、刑事達は、沈んだ様子で、店内を出て行く。

遠ざかる後姿を見ていた歩美が、意を決したように走り出した。

哀は慌てて後を追った。

歩美の声に、二人の刑事は驚いたように振り返った。

「どうしたの、歩美ちゃん？」

ああ、哀ちゃんも一緒なの？

でも、もう暗いからー」

佐藤の言葉を遮るように、歩美は言った。

「佐藤刑事、高木刑事、目をつぶって、手を出して」

高木と佐藤は、不思議そうに顔を見合わせた。

そして、歩美の前にしゃがみこみ、目を閉じ、手を差し出した。

歩美は、赤いビーズの指輪をポケットから出すと、佐藤の薬指にはめようとした。が、うまくはまらず、小指にはめた。

別のポケットから可愛くリボンのついた袋を、取り出し、それを破

いた。

中から出てきたのは、赤い指輪と同じデザインの青い指輪だった。それは、高木の小指に納まった。

「メリークリスマス、佐藤刑事、高木刑事」

自分達の小指にはまった、サイズの合わない指輪を見て、二人の顔がほころんだ。

「ありがとう、歩美ちゃん、もしかして、歩美ちゃんの手作り？」

「ウン、でも、ちょっと小さくって、ごめんなさい。」

あ、でも、哀ちゃん、ほら、こうすると、冠つけた王子様と、御姫様みたい」

歩美は、自分の発見に、夢中になって、高木と佐藤の手を、一まとめに自分の手で包み込み哀の前に差し出した。

歩美の言うとおり、中途半端にはまった指輪をつけた、二人の小指は、御伽噺の仲睦まじい、小人の王子と王女のようなだった。

―が、小指には持ち主がいて、その持ち主達の様子を見た哀は笑いをかみ殺した。

「素敵、まるで、結婚指輪ね」

哀は、とびきり無邪気な笑顔を作って言った。

「ほ、本当にありがとう、でも僕らまだ仕事があるから」

高木が慌てたように立ち上がった。

「まだ御仕事なの？」

少年探偵団が御手伝いしようか？もう冬休みだから、大丈夫よ」

「ありがとう。手伝ってもらいたい時は歩美ちゃんがいて言ってもこきつかうわよ」

佐藤は、ウィンクして言った。

「でも、今日は本当に遅いわ。送りましょう」

哀が答えた。

「大丈夫よ、用事がまだ済んでないし、帰りには阿笠タクシーが来る事になってるの」

子供達をコンビニに送り、高木と佐藤は駐車場へ戻った。

佐藤がそっと指輪を外した。

「これ、きつと、歩美ちゃん自分用だったのね」

「そして、僕のが、コナン君へのプレゼント。そうですね」

高木も自分の指輪を外して、見つめた。

佐藤は、指輪を両手でいとおしそうに包んだ。

「お互い、素敵なクリスマスプレゼントをもらったわね」

二人は、見詰め合って微笑んだ。

歩美と話すうちに、二人の刑事から、澱のような疲れが消えていくのを

哀は、見た。

“吉田さんには、かなわないわ”

そう思いつつ、現実的な問題に立ち返る。

「ねえ、吉田さん。あれ、江戸川君へのプレゼントだったんでしょ？
急いで代わりに何か買わないと。私、お金持ってるから」

すると、歩美は顔を赤くしながら、哀の耳元に唇を寄せた。

哀は目を丸くした。

歩美は、哀から離れると恥ずかしそうに言った。

「どうかしら？ね？哀ちゃん」

最初は、“そんなこと一人でやったら？”と答えようとした哀だったが、

歩美の顔を見ているうちに考えが変わった。

「いいわ。江戸川君きつと驚くわよ」

そして、改めて思った。

“本当に、吉田さんには、かなわないわ”

渋滞のせいで、先ほどのコンビニの前で、車の動きが止まった。

「あら？コナン君よ」

佐藤の声に高木も、佐藤の視線の先を見る。

コナンは哀と歩美の方へやってくる。

哀が何かをコナンに話す。

コナンは不審そうな表情をしつつ、見を閉じ立つ。

その両側に、哀と歩美が立って、そして二人同時にコナンの頬にキスをした。

コナンは、驚きで硬直して目を見開く。

いつもの落ち着きは影も形も無い。

それは、サイレント映画のワンシーンのような光景だった。

高木は、自分の顔に、血が登るのを感じて、慌てて目をそらし、動かない前の車のテールランプを見つめた。

「さ、最近の子は、大胆ですね」

「あら、違うわよ、高木君」

思わず佐藤の方を見た高木に、佐藤は先輩の口調で言った。

「ほら、高木渉巡査部長。よそ見しないで、しっかり前を見る」

高木は慌てて、正面を見て、ドライバーの手本となるべき姿勢になった。

「最近の子が大胆ってわけじゃないの。

昔から、女の子のほうが大胆なのよ」

急に体の左側が暖かくなり、耳元で、佐藤のささやきが聞こえた。

「Merry Christmas」

頬に柔らかな、感触。

高木の頭の中は、雪よりも真っ白になった。

前の車が動き出しても、すぐ動かないスカイラインに、トラックの運転手は、苛立ち派手にクラクションを鳴らした。
(おわり)

(後書き)

ちよつと、可愛いキスシーンを書きたかったので、
こんな、お話になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5721d/>

WinterBells

2010年10月13日13時38分発行